

金沢古典文学研究会近況

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-06 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00064280

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



金沢古典文学研究会近況

(1) 研究発表月例会

毎月一度、定期的に金沢大学教育学部にて開催されている研究発表は、今年の五月をもって百十四回を数えた。いわずもがなのことであるが、この発表会は、近く論文にまとめるべき研究発表の内容に独断や思わぬ誤謬やケアレス・ミスが存しないかを率直に相互批判しあう場として頗る有益と考えられる。地方在住の研究者にとってはこうした場こそ不可欠で、今後可能な限り続けていきたいと念願している。

例会開催日及び研究発表内容

(例発表表) 金沢大学教育学部人文演習室

- | | | |
|------|-------------------|-------|
| 第百三回 | 昭和五十五年六月三十日(月) | 藤島 秀隆 |
| | 魔曲「敷地物狂」をめぐる | |
| 第百四回 | 昭和五十五年七月九日(水) | 原田 行造 |
| | 二つの大原―鴨長明の生活環境管見― | |
| 第百五回 | 昭和五十五年八月二十一日(木) | 藤本 徳明 |
| | 浦島伝説と泉鏡花 | |

第百六回 昭和五十五年九月二十六日(金)

『発心集』と法然義

青山 克弥

第百七回 昭和五十五年十月三十一日(金)

藤原実方流離説話の背景

藤島 秀隆

第百八回 昭和五十五年十一月二十八日(金)

一条兼良の学問―『小夜のねざめ』を中心として―

原田 行造

第百九回 昭和五十五年十二月十二日(金)

『今昔物語集』卷二十七第二十五話をめぐって

藤本 徳明

第百十回 昭和五十六年一月二十三日(金)

『無名抄』における官位表記について

青山 克弥

第百十一回 昭和五十六年二月六日(金)

幸若舞曲『富樫』の形成

藤島 秀隆

第百十二回 昭和五十六年三月十一日(水)

『古事談』所収の中関白道隆関係説話小攷

原田 行造

第百十三回 昭和五十六年四月二十二日(水)

『発心集』と法然義再論

青山 克弥

第百十四回 昭和五十六年五月二十日(水)

『観音利益集』第五話をめぐる諸問題

藤島 秀隆

(2) 『北陸の伝承と人間像』刊行のこと

このたび、かつて北国新聞に連載された「越のこころ」と最近掲載された「ほくりく物語絵巻」を中心に、二・三の新稿を書き加え、更に資料編をも添えて、昨年十一月に『北陸の伝承と人間像』（二百五十七頁）と銘うって一書を刊行した。ささやかながら、同人四人の協同作業の成果である。

新聞の掲載原稿ということで、啓蒙的な面に配慮を加えたことは確かだが、それ以上に新視角から独自な人物像の把握につとめ、予想を遙かに超えた丹念な調査と真剣な勉強が必要であった。論文を書くのと同程度の大きなエネルギーを要したというのが偽らざる実感である。『地方の時代』の到来が叫ばれる今日、北陸の文化論を構築していく一助になればまことに喜ばしい限りである。

(3) 豪雪の想い出―松村先生御来沢―

今回の大雪は、サンパチ豪雪以来のものといわれた。くる日もくる日も降りしきる雪雪雪！交通機関の確保・道路の除雪・屋根の雪おろし等々、雪国の冬には太平洋側の人たちには理解を超えたものがいっぱいある。そうしたさ中、昨年十二月下旬に松村博司先生が金沢にお見えになった。久しぶりに先生を囲んで、草創期の国文学界の研究状況や、さまざまなエピソードをお伺いする宴席を持つことができ、とてもよい想い出となった。先生は、往昔、旧制山形高校に在職された御経験から、雪には慣れっこだあるらしいが、何十年ぶりに北陸の異質な大雪をまのあたりにし、すっかり堪能されたようであった。このたび、未踏の大著『栄花物語全注釈』（全八冊）を完成され、更に次のお仕事に着手されるとのことである。今後一

層御健康に恵まれ、国文学界のため益々の御活躍をお祈りする次第である。

(4) 畏友藤本氏の福岡転勤のことなど

今春四月、わが同人藤本徳明氏が金沢を離れ、福岡女子大学に転任することになった。まさに青天の霹靂である。氏はこれまでに、文学的な鋭い感性と明晰な理論的頭脳を駆使して、研究対象を見事に分析して見せてくれた。その方法論から啓発されるどころ、きわめて大なるものがあつた。そして、その学問業績は夙に『中世仏教説話論』『北陸の風土と文学』（ともに笠間書院刊）に結実している。われわれは、この有力な同人を失い大きな危機感を抱いた。だが、結成十一年目のこの困難を克服し、これを機に更に一まわり大きく脱皮していこうと新たな決意を抱いている。

なお、このたび新しく金沢大学文学部の西村聡氏と金沢美術工芸大学の竹村信治氏を同人に迎え、スタートをきることにした。両氏とも二十代後半にさしかかった新鋭の研究者である。西村氏は謡曲を専門とし、謡曲と説話との関わりに、竹村氏は『今昔物語集』の天竺部を中心に研究テーマを設定している。従前通りの諸賢の暖かい御督励を切に願ひする。